

## 土木賞について

土木賞は、施工プロセスを重視し総合評価により選考します。この他、総合評価の結果によらず固有の課題に対する取り組み(施工プロセスを支えた活動、技術開発など)で特に優れた案件を、土木賞の中で特別賞として表彰することとしています。いわば、施工プロセスにおいて「何かキラリと光る取り組み」に焦点を当てて選考することとしています。

具体的な過去の特別賞の受賞例を見えます。

### <第1回土木賞 特別賞> 湖陵多伎道路多伎PC上部工事(橋梁)

小規模工事ながら、生産性向上のために CIM を積極的に取り入れ、それを複合現実技術と連携させることにより、現場作業や出来形・品質管理作業の効率化や省人化に成功。“モノづくりの原点”として施工プロセスを支える技能労働者の作業の効率化を徹底した点が優れており、特別賞に値するものとして評価した。



### <第2回土木賞 特別賞> 常磐橋修復事業(橋梁/石橋復元)

東日本大震災により損傷を受けた近世由来の純空石積構造を持つ石造アーチ橋の修復事業。約8年に及ぶ工事期間中、修復復元に対する熱意を持続させ、円滑なアーチ軸力伝達面の形成や貴重な石材の再利用、複雑な形状の水切石復元など、歴史的土木建造物の保存継承のみならず、現在の都市空間に生きるインフラとしても再生させた。



#### 評価のポイント/課題に対する取り組み・視点/効果・成果

そのほか、第1回、第2回の特別賞の選考にあたり、着目された取り組みの例を以下に示します。

- 事例1 世界初となる既存市街地での格子状地中壁による液状化対策を、住民や多様な関係者が相互に協力して、安全・環境に十分配慮し、難条件の工事を克服した。
- 事例2 軟弱地盤における、構造物基礎工として当初予定されていたセメント系固化材を変更し、環境保全や温室効果ガスの削減、戦後植林された国内の人工林の木材活用により炭素固定および二酸化炭素の削減を目的に、木杭への変更を試みた。
- 事例3 地震により発生した、大規模な河道閉塞を10月の工事着手から次期の融雪出水期となる翌年3月末までの、積雪期を含む約半年間に完了させるため、情報化施工、プレキャスト化の活用により、安全確保に万全を期し、緊急対策工を行った。
- 事例4 プロジェクトの所在住民の地防災意識が高く、地縁のある篤志家からの寄付金がベースとなって実施された。また、地元経済界主導の市民募金も行われ、まさに地元による地元のためのプロジェクトである。
- 事例5 国内初のスポーツ施設整備にあたり、国内では類似施設はなく、設計基準も無いため、国際競技団体が定める競技場の技術要件に基づき設計を行った。性能規定による部分が多く、詳細構造については協議団体との協議を行い決定した。

以上のように、「キラリと光る」点として、

- ・新しい技術を活用しつつ、技術の伝承
- ・前例がなく手探りの施工
- ・構造物の歴史的価値と当時の施工技術の保全
- ・地域住民との協働
- ・地球温暖化対策(カーボンニュートラル)
- ・厳しい工期への挑戦

といった、型にはまらない切り口による課題への挑戦が特別賞として着目されています。